

宮部金吾博士によって「斜里山道」で 採集された植物標本の産地

高橋 英樹

060-0810 札幌市北区北10条西8丁目, 北海道大学総合博物館

Localities of Plant Specimens Collected by Dr. Kingo Miyabe at “Shari Sando”

TAKAHASHI Hideki

The Hokkaido University Museum, N10W8 Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0810, Japan. hide@museum.hokudai.ac.jp

宮部金吾 (1860-1951) は新渡戸稲造, 内村鑑三と同期の札幌農学校二期生で, 言わずと知れた「北大植物学」の開祖であり, 北海道各地で植物採集を行っている。さて, 北大総合博物館陸上植物標本庫 (SAPS) に保管されている宮部標本の中に「Shari Sando (斜里山道)」という地名が出てくる。採集年としては1884 (明治17) 年 (図1, 2) と1894 (明治27) 年 (図3, 4) の二つがある。この10年を隔てて採集された同じ「Shari Sando」標本は, 異なる産地であると思われるので注意喚起を含めて紹介する。

宮部は1894 (明治27) 年に北海道庁委託のコンブ類調査のため7月9日から8月29日までの52日をかけて北海道全体を周り, 8月9日に標津から斜里へと抜けている (川嶋1996)。この北海道昆布調査旅行での峠越えルートは根北峠越え (現在の根室地方標津郡標津町と網走地方斜里郡斜里町の境界) であり, 9日に標津を出発したあと根北峠東側の瑠辺斯 (るべす) で昼食をとった後, 夕方6時頃に斜里に着いた。9日付けの日記では「新しい斜里山道を通して北見の斜里に向かった。旧道は今では使われていない。旧道を通る旅はまるまる二日を要したが, 新道を通ると馬で一日の楽な旅である。距離はわずか十五里。」とある (川嶋1996)。瑠辺斯

という駅通の名前, 15里 (約60 km) という距離からすると, 1894年採集の「Shari Sando」標本は, 明らかに現在の根北峠 (= 新斜里山道) 越えのルートで採られたものである。

一方, その10年前の1884 (明治17) 年の道東調査は6月9日から8月24日までの3箇月近くに及ぶもので, 彼自身の人生の中で最も思い出深い調査旅行だった (途中でクロピイタヤ *Acer miyabei* Maxim. を発見し, 色丹島・択捉島での調査は後の博士論文「The Flora of the Kurile Islands」の基となった)。この1884年採集の「Shari Sando」標本の採集地点については以下の2つの解釈がありうる。

一つ目は1894年と同じ根北峠 (= 新斜里山道) だったとするものである。この根拠としては,

1) 宮部金吾博士記念出版刊行会 (1953) での1884 (明治17) 年夏期の採集旅行行程図 (図5参照) においては, 宮部による標津から斜里へのルートは根北峠越えのルートとして描かれている。

2) 宮部金吾博士記念出版刊行会 (1953) の本文では, 1884年7月12日の斜里山道越えに際して「標津からは中割, サツルと泊りを重ね, 有名な斜里山道を越えた。中割というのは今の糸櫛別 (イ

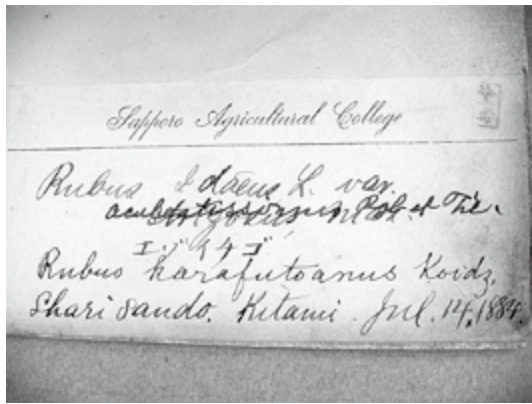


図1. エゾイチゴ, 「Shari Sando, Jul. 14, 1884 [no collector name]」, 採集者名はないが, 明らかに宮部による採集標本, 清里峠越えの往路での採集。

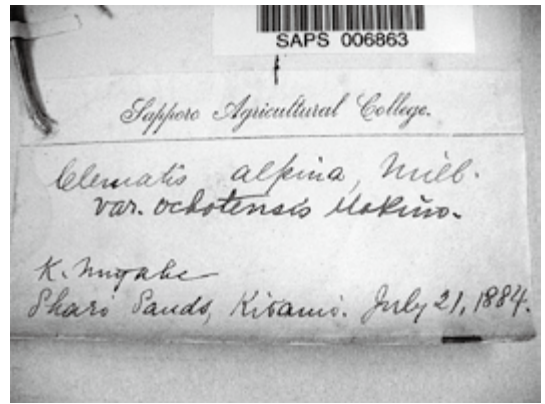


図2. ミヤマハンショウヅル, 「Shari Sando, July 21, 1884. K. Miyabe」, 清里峠越えの復路での採集。

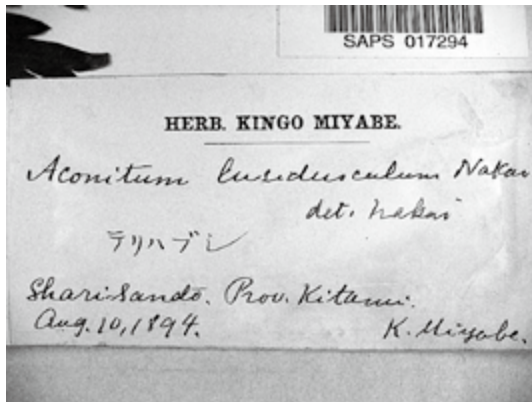


図3. テリハゴシ, 「Shari-Sandō, Aug. 10, 1894. K. Miyabe」, 日付から判断すると, 根北峠を越えた斜里-網走近辺での採集。

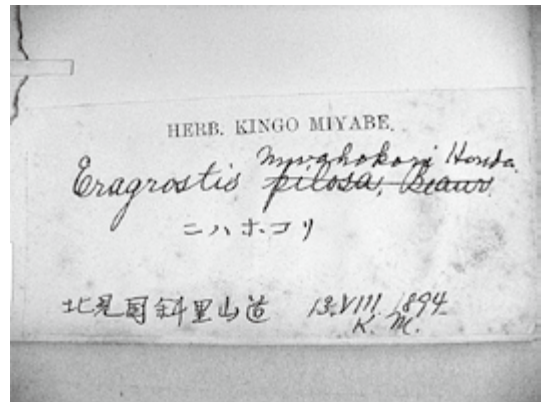


図4. ニワホコリ, 「斜里山道, 13. VIII. 1894. K. M.」, 日付から判断すると, 根北峠を越えた網走近辺での採集。

トクシベツ)ではないかと思う。」とある。糸櫛別は根北峠ルート of 瑠辺斯と標津の間に位置する地名である。

二つ目は, 1894年とは異なり, 現在の根室地方標津郡中標津町と網走地方斜里郡清里町の境界の清里峠 (=旧斜里山道) だったとするものである。この根拠としては,

3) 根北峠 (=新斜里山道) は明治 18 (1885) 年に開削された (永井 2003) ので, 宮部が採集した 1884 年当時には, 新斜里山道は未整備だったと思われること。

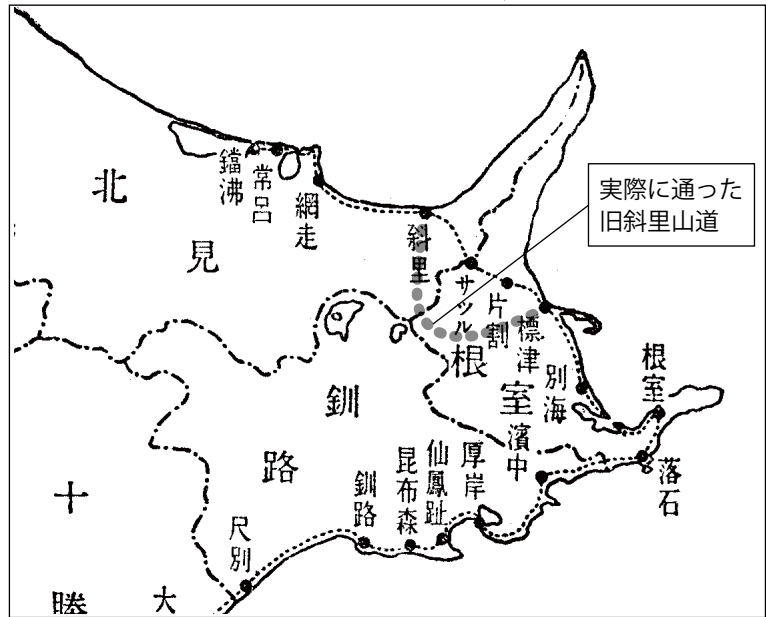
4) 宮部金吾博士記念出版刊行会 (1953) の本文中に斜里山道での地名として出てくる中割, カジ

ウシはともに清里峠 (=旧斜里山道) 越えルートに見られる地名である (内務省地理局 1887, 但しカジウシは地図ではカンチウシ)。

5) 宮部金吾博士記念出版刊行会 (1953) によると, 1884 年の採集旅行行程での標津から斜里までの総距離は 27 里 28 町 (約 110 km) となる。根北峠越えの標津-斜里間の約 60 km, 清里峠越えの標津-斜里間の約 100 km を比較すれば, 清里峠越えの可能性が高い。

1) については, 宮部金吾博士記念出版刊行会 (1953) が宮部博士の死後 2 年経って出版された刊行物であり, 編集の過程で不正確な地図が作られた可能性があること。2) については「今の糸櫛別

図5. 宮部 (1953) における第八図「明治17年夏期の採集旅行行程図」(部分). 実際に通ったと推定される清里峠 (=旧斜里山道) 越えルートを太点線で追加.



ではないかと思う。」と、記録というより思い出として述べられていること。これらより一つ目の解釈よりは、二つ目の解釈、つまり1884年採集の「斜里山道」は現在の清里峠 (=旧斜里山道) 越えルートだった可能性が高いと思う。

さらに、1884年の「斜里山道」沿いで見られた植物種から考察してみよう。宮部金吾博士記念出版刊行会 (1953) において、1884年の「斜里山道」ルートでは以下のような植物がリストされている。

標津-片割 (七里): トクサ, エゾノミズタデ, ジュンサイ, オオレイジンソウ, ベニバナヒョウタンボク (掲載順重複を含む, 以下同, []内は現在普通に使われる和名)。

片割-サツル (十三里二十八町): エゾキスゲ, ケヤマハンノキ, ダケカンバ, サワシバ, ミズナラ, ハルニレ, アズキナシ, シロザクラ [ミヤマザクラ], エゾヤマザクラ, エゾイタヤ, カラコギカエデ, ヤチダモ, アカダモ [ハルニレ], ミズナラ, ハコヤナギ, ウダイカンバ, ナナカマド, シロザクラ, シウリ [シウリザクラ], シナノキ, カツラ, コブシ, オヒョウ, アカエゾマツ, エゾマツ, トドマツ, コヨウラクツツジ, ウコンウツギ, タニウツギ。

サツル-斜里 (七里): ドロノキ, ミズナラ, カツラ, ヤマグワ, キタコブシ, ホウノキ [ホオノキ], イヌエンジュ, エゾイタヤ, シナノキ, ヤチダモ, アオダモ, ノリウツギ, ハシドイ, コブノキ [エゾニワトコ], ツルアジサイ, イワガラミ, ツタウルシ, ドロノキ, トクサ, エゾキスゲ, ムラサキ, ムシャリンドウ, エゾノチチコグサ。

以上のうち、起点の標津に近い「標津-片割」間と終点の斜里に近い「サツル-斜里」間の地域を除き、中間の「片割-サツル」間で見られた植物種を対象とし、高橋 (2010) により根北峠を含む知床半島地域でこれまで採集されていない種類を抽出すると、カラコギカエデ, カツラ, タニウツギの3種がそれにあたった。これらのうちSAPS標本に抛ればタニウツギは道東に分布しないので、宮部のタニウツギの記録は誤認か誤記と思われる。カツラは知床半島地域での採集標本がない (高橋2010) が、当地域では普通に産する (内田私信) との事なので、おそらく高木であるために標本採集がされていないだけであろう。またカツラはSAPSでは弟子屈や屈斜路湖産の標本があるので、根北峠コースであっても清里峠コースであってもその生育量に明らかな差はなさそうである。一方、カラコギカエデは北海道内では石狩低地帯や釧路、

根室地方の低地-低山地の湿地に多く、さらに網走、十勝、日高地方などの湿地に点在しているが、低木であるカラコギカエデ標本が採られていない知床半島地域(根北峠を含む)では実際に少ないか少ないのだと思われる。7月13の終点サツルは、「現在の札鶴ではない。斜里山道中の一軒小屋のあったところは、根室側から北見側に越えた所である。」「山中の一軒屋なるサツルに着いたのは、かなり暗くなってからであった。」とあるように、この日のルート(片割-サツル間)は峠から根室側に偏っていたと思われる。カラコギカエデが峠-根室側で見られているということは、標津から糸櫛別、瑠辺斯といった山中を通る根北峠コースよりも、標津から現在の中標津、養老牛近辺など低地の湿原を長く通る清里峠コースの方がより自然と思われる。

なお斜里付近の草原で採られたとされる希少種ムラサキ、エゾノチチコグサの標本ラベルの産地は「Yanbetsu」とあり、現在の斜里町の西側に位置する小清水町止別で採られている。これらは山道を抜けた後に採集されたとされるので、この地理的な位置関係からも1884年に抜けた山道は清里峠でなければならない。

以上より、宮部金吾の採集標本においては、1884年採集の「斜里山道」標本は清里峠(=旧斜里山道)越えのルート、1894年採集の「斜里山道」標本は根北峠(=新斜里山道)越えのルートであると思われる。両地域は直線で23 km程度しか離れておらずどちらも根室地方と網走地方の境界に位置するというものの、清里峠は摩周湖の東北側に阿寒山系の東北端にあたり、一方、根北峠は斜

里岳の東麓で知床山系の南西部にあたるので、植物地理学的には別地域と考えたほうがよい。このため、2つの「斜里山道」を混同しないように注意する必要がある。

謝辞

本稿をまとめるきっかけを与えて頂き、当該地域の植物の生育状況についてコメントを頂いた斜里町立知床博物館の内田暁友学芸員に厚くお礼申し上げます。また宮部金吾の日記や資料について調べていただき、調査ルートに関するご意見もお寄せ頂いた北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館の加藤克助教にも感謝申し上げます。

引用文献

- 川嶋昭二. 1996. 宮部金吾著北海道昆布調査旅行日記. 地域史研究はこだて 24: 11-49.
- 宮部金吾博士記念出版刊行会(編). 1953. 宮部金吾. 365 pp. 宮部金吾博士記念出版刊行会, 札幌.
- 永井秀夫(監). 2003. 北海道の地名. 日本歴史地名体系 1. 1,755 pp. 平凡社, 東京.
- 内務省地理局. 1887 (復刻2003). 改正北海道全図. 永井秀夫(監), 北海道の地名. 日本歴史地名体系 1. 特別付録. 平凡社, 東京.
- 高橋英樹. 2010. 知床半島産維管束植物標本データベース. 知床財団(編), 平成21(2009)年度知床世界自然遺産地域生態系モニタリング調査業務報告書. pp. 78-202. 環境省, 東京.